

大槻文法における「口氣」の来源考

王 娟¹⁾

Textual Research on the Origin of the Term “Tone” in Fumihiko’s Grammar

WANG Juan

“Voice” in the philological studies of the Meiji Period was not translated into “aspect” as it is now but rather into “sou (相)” Otsuki Fumihiko however translated it as “tone” which 齊木・鷺尾 claimed to be “an excellent translated equivalent” (2012: 130-150) He believed that this translated equivalent catered to the characteristics of Japanese, expanded the new concept of “voice” eliminated confusion and was a great contribution from Fumihiko’s Grammar. As to the origin of “tone” 齊木・鷺尾 deemed that Fumihiko referred to a certain dictionary, most probably *Webster’s Dictionary* (2012:130-150) But as for as the author of this paper is concerned, “tone” was a Chinese lexicon, and it is far from convincing that it was originated in an English dictionary. In light of this, this paper tries to discuss the origin of “tone” by a close examination of *The Mandarin Chinese* (1869) and *Fumihiko’s Explanation of Chinese Dictionary* (1877)

Key words: Otsuki Fumihiko; tone; *The Mandarin Chinese; A Guide to Grammar*

一、はじめに

大槻文彦は1847（弘化4）年に生まれた日本の国語学者である。日本初の近代的国語辞典『言海』の編纂者として著名で、林大氏に「その業績は、辞典の編修、文典の著述、および国字問題への尽力において著しい」と評価される²⁾。また、「大槻文法」は、「山田文法」「松下文法」「橋本文法」「時枝文法」と合わせ、日本の「五大文法」と一般的に認められている。

なお、「大槻文法」といえば、『言海』の品詞分類を含む日本語文法の組織をまとめた『語法指南』

1) 王娟 中国厦門大学嘉庚学院多元文化研究中心／中国福建省兩岸語言应用与叙事文化研究中心 副教授／厦門大学人文学院博士後

2) 『世界大百科事典4』（平凡社、1955年）「おうつきふみひこ」の項

(1893)³⁾(次は『語』と略す)と『広日本文典』(1897)⁴⁾(次は『広』と略す),『広日本文典別記』(1897)⁵⁾(次は『広別』と略す)などがその集大成として、高く評価されている。これらにより、大槻は明治期の近代的な文法論の先駆けとされ、現代の文法論にも多大な影響を及ぼした、と言われている。

『語』(1893)⁶⁾の動詞項目の注には、「洋語ノ動詞ニハ、Voice(口氣ト譯ス)Tense(時ト譯ス)トイウモノアルガ、我が動詞ニテハ、是等ノ意義ハ、他ノ助動詞ト連帯關係シテ始メテ起ルガ故ニ、今ハ、助動詞ノ條ニテ説クコトトセリ、左ニ是等ノ異同ヲ辨ゼム」という記述がある。また、『語』(1893:33)および『広別』(1897:63)では、「Voiceハ、口氣ト譯スベクシテ、辞書ニ據レバ、『動詞ノ一種ノ変体ニシテ、文主(Subject)ト、動詞ノ動作ト、ノ關係ヲ指別セシムル別体ナリ』トアリ。」と述べている。

当時の明治時代、現在とは逆に、ヴォイスを「態」ではなく、「相」と訳されている。しかし、大槻がVoiceを「口氣」に訳していた。大槻が使った「口氣」という訳語に対して、斉木・鷺尾(2012)は、「なかなか優れた訳語」で、日本語の特性を踏まえてヴォイスという新しい概念を適切に拡張してヴォイス概念の混乱を避けたことを、大槻文法の重要な貢献と位置付けている⁷⁾。

また、この優れた訳語の「口氣」の来源に関しては、斉木・鷺尾(2012)は「大槻は何らかの辞書を見て、その解説を訳したものと思われます」と述べている⁸⁾。さらに、「大槻が参照した辞書と言えば、まず思い付くのがウェブスターです」と主張している⁹⁾。しかし、「口氣」は、そもそも漢語で、英語辞書であるウェブスターを直接参照して考え着くのは、納得しかねない部分が残っている。また、その来源を究明すれば、全面的に大槻文法の特徴をつかむのにも大きな意味があると思われる。

ウェブスターの影響を否定するのが目的ではないが、本稿では、大槻文法における「口氣」の来源に関しては、その背景には『大槻文彦解「支那文典」』(1877)¹⁰⁾(次は『支』と略す)の存在があることおよび「口氣」との関連を提示してみたい。

『支』(1877)は大槻が出版した最初の文法書でもあり、大槻文法だけでなく、日本の国語研究にも大きな影響を与えていると思われる。「口氣」などの文法意識は、大槻が作った中国語の文法体系および日本語の文法体系、それから大槻以後の文法研究者というルートを通し、文法解説上に影響が出ている。

なお、王(2015)¹¹⁾では、『文学書官話』(1869)¹²⁾(次は『文』と略す)、『支』と『語』および『広』の対照比較をし、大槻文法の品詞体系の形成の経緯をすでに指摘している。

3) 大槻文彦『語法指南』(小林新兵衛, 1893年)

4) 大槻文彦『広日本文典』(出版:大槻文彦, 1897年)

5) 大槻文彦『広日本文典別記』(出版:大槻文彦, 1897年)

6) 前掲『語法指南』31頁。

7) 斉木美知代・鷺尾龍一『日本文法の系譜学——国語学史と言語学史の接点——』(開拓社, 2012年)。130-150頁。

8) 前掲『日本文法の系譜学——国語学史と言語学史の接点——』, 130頁。

9) 前掲『日本文法の系譜学——国語学史と言語学史の接点——』, 130頁。

10) 大槻文彦『大槻文彦解「支那文典」』乾・坤。(文求堂, 1877年)。

11) 王娟「大槻文彦の品詞体系の形成——『支那文典 大槻文彦解』から見る——」(『比較文化研究』2015年, 第119号) 319-330頁。

12) 高第丕・張儒珍『文学書官話』(出版社不明, 1869年)。

二、「口気」概念の発生

現代中国語の文法論においては、文の「語気」により、文を陳述文、疑問文、祈使文と感嘆文の四種類に分けるのが一般的である。このような分類の内容は、文法書の中では基本的に動詞を考察する章に入れず、文を考察する章に配属している。つまり、文の「語気」というのは、動詞だけの問題ではなく、形容詞文にもあり、また文末助詞なども含めて考えるべき問題だということである。

なお、「語気」あるいは「口気」という文法用語はいつ頃から使われていたのであろうか。

林玉山は『漢語語法学史』(1983)¹³⁾の中で、古代の中国語文法書として、いくつかの書籍を挙げている。その中には、動詞などの「実詞」に関する論考が、西漢時代の『尔雅』、東漢時代の許慎の『説文解字』、鄭玄の『説文解字注』、南宋末の張炎の『詞源』などがある。また、林玉山(1983)によると、句論をしている著作は、唐天台沙門湛然の『法華文句記』、元時代の『程氏家塾讀書分年日程』などがあるようである。唐天台沙門湛然の『法華文句記』は、「句」および「読」の定義をつけ、『程氏家塾讀書分年日程』はその二つの区別を説明した。その後、文の「省略」や「倒置」問題も論じられた著作も唐の時代にある。これらの著作の中では、「語気」か「口気」に関する文の分類を見当たらない。他に、1815(文化12)年に出版された『通用漢言之法』¹⁴⁾と1844(天保15)年に出版された『英華韻府歷階』¹⁵⁾の中でも、「口気」の用語を見当たらない。管見の限り、他に「口気」という用語を収録している早期の書籍には、『英華萃林韻府』(1872)¹⁶⁾しかない。しかし、『英華萃林韻府』(1872)の刊行は、『文』の三年後となる。つまり、文の「口気」を意識し、またそれを文の分類基準にするのは、1869年中国山東省の登州府(現在の蓬萊)で出版された『文』が最初ではないかと推測している。

三、『文学書官話』

1869(明治元)年に、アメリカ人の宣教師高第丕(Tarleton Perry Crawford)と中国人の張儒珍が中国山東省の登州府(現在の蓬萊)で、『文』という中国語文法書を出版した。『文』は中国国内ではあまり注目されていなかったが、日本に輸入した後、三人の研究者により日訳本を出版した。それは、大概文彦の『支』(1877)、金谷昭の『大清文典 金谷昭訓点』(1877)¹⁷⁾および村上秀吉の『支那文典』(1893)¹⁸⁾である。

前後16年間のうちに、一つの文法書に三つの日訳本が現れたので、『文』の影響が大きかったもの、および文法書に対する需要が高かったものと思われる。

13) 林玉山『漢語語法学史』(中国湖南教育出版社, 1983年)

14) Robert Morrison: A Grammar of the Chinese Language(『通用漢言之法』). Serampore: The Mission Press, 1815.

15) Williams, Samuel Wells. An English and Chinese Vocabulary in the Court Dialect(『英華韻府歷階』), Macao, 1844.

16) Justus Doolittle: Vocabulary and Hand-book of the Chinese Language(『英華萃林韻府』), Rozaric, Marical and Company, 1872.

17) 金谷昭『大清文典 金谷昭訓点』(清山秀吉出版, 1877年)。

18) 村上秀吉『支那文典』(博文館, 1893年)。

『文』の価値は近年中国国内で改めて認識され、李（2008：257）は次のように評価している。

『文』の刊行は『馬氏文通』に先んじること29年。中国国内では、中国語で書かれた「北京官話」の最初の口語文法書の一つである。その理論体系は西洋の文法学を融和し、独特で学術的貢献が高い。¹⁹⁾

『文』は全部で21巻あり、第一章は発音に関する「論音」で、第二章は漢字の構造に関する「論字」である。第三章の「論名頭」から第十七章の「論語助言」までは、中国語の語彙を十五種類の品詞に分類して論述している。第十八章の「論話字換類」から第二十一章の「論話色」までは、語用論、文章論およびレトリックに関して論じている。全書は、音声学、文字論、品詞論、統語論、語用論、文章論などの内容を備え、当時日本で一般的に使用されていた『語言自述集』などと比べても、実に体系的本格的な文法書である²⁰⁾。

三つの日訳本を比べてみると、金谷昭の『大清文典 金谷昭訓点』（1877）と村上秀吉の『支那文典』（1893）は、基本的には原文に日本語の訓読を付けているだけである。一方、『支』は、三つの中で一番早く出版され、金谷昭の『大清文典 金谷昭訓点』（1877）よりも一箇月ぐらい早く出版されたもので、さらに大槻氏より自分なりの解説を付け加えている。

なお、『文』（1869）は、「語気」ではなく、「口気」という言い方を使っている。第十章『論靠托言』、つまり動詞を考察する章の中で、次のように「口気」を論じている。

靠托言（动词）有三个口气，叫直说的口气，问的口气，使令的口气。像，我爱他。爱是靠托言，直说的口气。我不相信他的话。相信是靠托言，直说的口气。地是圆的。是是靠托言，直说的口气。你有钱没有。有是靠托言，问的口气。你什么信我的话。信是靠托言，问的口气。今天才抬了号么。抬了是靠托言，问的口气。进来坐罢。进来是靠托言，使令的口气。你不哭罢。哭是靠托言，使令的口气。你好好听我的话。听是靠托言，使令的口气。

『文』（1869）は、上述のように、動詞に「直說的口気」「問的口気」と「使令的口気」という三種類の「口気」があるとしている。また、その例文を見ると、「直說的口気」は現代中国語文法にある「陳述文」に相当し、「問的口気」は現代中国語文法にある「疑問文」に相当し、「使令的口気」は要求・願い・命令などの気持ちを表現しており、現代中国語文法にある「祈使文」に相当している。このような分類は、すでに現代中国語文法の理論に極めて近い。

しかし、第六章の『論形容言』など、形容詞や他の品詞を論じる章では、「口気」問題を言及していない。つまり、『文』（1869）では、「口気」は、動詞にしか関わらない問題としている。これは、『文』

19) 李無未「日本漢語口語語法研究的先声——讀1877年刊行的『支那文典』」（『言語学論叢』37），257頁。なお、原文は中国語で、訳は筆者による。

20) この部分の論述は、詳しく前掲の王娟（2015）を参照してください。

(1869) の不足だと言えるであろう。

また、『文』（1869）の第十九章は、「総講十五類的話の様兒」で、文論である。この章は、中国語教育現場に文法分析の見本を提示するため、「真神拿泥造了一个男人，也吹气在他的鼻子里，他就活咯。」「象是最大的走兽。」「今天不能去。」「你要么？」「你走罢。」という四つの例を取りあげ、語から文の「口氣」まで詳しく分析している。

一番目の文は「直説的口氣」で、三番目の文は「問的口氣」で、四番目の文は「使令的口氣」だとしている。そして、「么」は「問語言」²¹⁾で、「疑問」という口氣の記号で、「罢」は「語助言」²²⁾で、「使役・命令」という口氣の記号だと説明している。

このような考察を見ると、『文』（1869）の著者は、文を論ずる章でも「口氣」の問題に触れているが、「口氣」を基準にして文を分類する意識がまだない。『文』（1869）の著者は、あくまでも「口氣」を動詞にしか関わらない文法問題として扱っているという立場が窺える。

さて、大槻文彦が『文』（1869）を訳した時、「口氣」をどのように扱っていたかと見てみよう。

大槻が、『支』下巻（1877）で、「三個口氣」という『文』（1869）の元にあるタイトルの下に図1のように「動詞ノ法」を付けている。

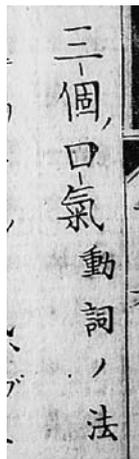


図1 「三個口氣」のタイトル²³⁾

わざわざ「動詞ノ法」を付け加えるのは、大槻も『文』（1869）の著者が「口氣」を動詞にしか関わらない文法問題として扱っていることに気づいたのではないかと考える。

また、大槻はこの三種類の「口氣」を訳した以外に、特別「直説的口氣」と「使令的口氣」について、次のような解釈を付け加えた。

21) 「問語言」は、「么、甚么、为甚么、怎么、呢、岂、多会、几时、可不是」のような疑問文に使用される疑問詞や文末助詞のことである。（前掲『文学書官話』（1869：35））

22) 「語助言」は、「啊、罢、咳、哎、哟、罢了」のような疑問文以外の文に使用される文末助詞のことである。（前掲『文学書官話』（1869：35））

23) 前掲『大槻文彦解「支那文典」』、6頁。

口氣トハ物言ヲザマノ意ニシテ同一ノ靠托言ナルモ其口氣ニ依リテ意変ズルナリ直説ハ「アタリマヘ」ニ言フナリ使令ハ「イヒツクル」ナリ

大槻は、「直説的口氣」は当たり前のように言う文で、「使令的口氣」は言いつける時に言う文だと説明した。原書の『文』（1869）には、この三種類の「口氣」の説明には例文しかなく、日本人の中国語教育者と学習者が理解しやすいために、大槻がこのような説明を付け加えるのであろう。

四、大槻文法にある「口氣」

『馬氏文通』（1898）²⁴⁾には、「口氣」か「語氣」に関する論述がない。しかし、『新著国語文法』（1924）²⁵⁾には、「語氣——助詞細目」という第十七章があり、助詞を判断する主な基準にし、文を「決定句、商榷句、疑問句、驚嘆句、祈使句」という五種類に分けている。「口氣」を動詞範疇の問題にする『文』（1869）の立場とは違う。

なお、本稿は、主に「口氣」概念は、日本における広がりを見てみたいと考える。また、『支』（1877）は、大槻文彦の最初の文法書でもあり、また氏の唯一の中国語文法に関する著作でもある。それで以下は、大槻が1889年に出版した日本語文法研究に大きな貢献をした『語』（1893）、『広』（1898）、『広別』（1898）を見、氏が『文』（1869）から受けた「口氣」に関する影響が、自分が作った日本語文法体系の中でどのように広がっていかを考察してみる。

動詞の語氣について、『語』（1893）には次のように語られている。

○動詞ノ法 動詞ノ変化ニ因リテ、語氣ニ種種ノ態度ヲ生ズ、コレヲ法トイフ。其法、七種アリ、即チ、

- (一) 直説法 (二) 分詞法 (三) 接続法 (四) 折説法
- (五) 熟語法 (六) 名詞法 (七) 命令法 ²⁶⁾

大槻は、『文』から「口氣」という術語を引用して使っているが、上述の分類法は、やはり基本的には西洋文法、つまりラテン語の文法論を踏まえている。『文』の「口氣」による分類は、文全体が表現しようとする話し手の気持ちを見ているのであるが、大槻の「口氣」による分類は、接続方法を中心に考えている。話し手の気持ちであれ、接続方法であれ、どちらでも「ものの言い方」であるのは共通であるが、『文』と大槻の注目点が違うことも明らかである。

また、『語』の「口氣」に関する論述は、『支』（1877）と比べると、次のような結論がわかる。

(1) 『文』は、「口氣」という用語を使っているのに対し、『語』は「口氣」と「語氣」の両方を使っ

24) 馬建忠『馬氏文通』（商務印書館、1898年）。

25) 黎錦熙『新著国語文法』（商務印書館、1924年）。

26) 前掲『語法指南』、24頁。

ている。上述のように『語』（1893）では「語気」という用語を使っている²⁷⁾一方、語（1889）²⁸⁾と『広日本文典別記（1898）』²⁹⁾では、「Voiceハ口気ト訳スベクシテ」と述べている。また、1876年に出版された中根淑の『日本文典』（1876）は、文章論の起語結語という節の中でも「語気」という用語を使っている³⁰⁾。しかし、「動詞が表す動作と主語との関係を言い分ける、動詞の別の形」のように、「口気」に明確な定義があるものは、大槻以外はほとんどない。

（2）『文』は、「口気」を動詞研究の中の問題しかにしていけないのに対し、大槻は、「口気」を取り扱う際、動詞だけの問題ではないように扱っている。つまり、『語』は動詞以外に、形容詞にも関わっている問題にしている。また、『広』（1898）は口気により文を分類する際、「動詞形容詞助動詞」の三種類に関わる問題として扱っている。³¹⁾『広』は、文の結法により、「尋常の結法」「ぞ、なむ、や、かノ結法」「こそノ結法」という三種類に分けている。氏の説明を考えると、「尋常の結法」は『文』の「直説的口気」に近い、「ぞ、なむ、や、かノ結法」は主に「問的口気」の口気で、「こそノ結法」は「使令的口気」に近いと思われる。

なお、『語』での形容詞の口気による分類は、基本的に動詞のそれを模倣しているとわかった。形容詞の口気に関しては、『語』（1893）は次のように述べている。

形容詞ノ法ハ、動詞ノ法ト、大ニ似テ、少シ異ニシテ、分詞法、名詞法、命令法、無クシテ、別ニ形容法、副詞法アリ。（但シ、形容法ハ、分詞法ト、粗、同ジキモノナリ、）即チ、

- （一）直説法 （二）形容法 （三）接続法
（四）折説法 （五）副詞法 （六）熟語法 ³²⁾

大槻が『文』を訳す時、元のタイトルにわざわざ「動詞ノ法」を付けているのは、形容詞など他の品詞と比較をし、『文』には言及していないが、日本語の形容詞にも口気の問題があることにすでに意識していたのではないかと推測できる。

まとめると、『文』から『語』、それから『広』までの扱い方を見ると、大槻が「口気」に関する論述を訂正しつつ、また完全になりつつある流れがわかる。

（3）『語』は、動詞の口気を考える際、助動詞の重要性を十分に強調しており、次のような記述がある。

洋語ノ動詞ニハ、Voice（口気ト訳ス）Tense（時ト訳ス）トイフモノアルガ、我が動詞ニテハ、是等

27) 前掲『語法指南』、24頁。

28) 前掲『語法指南』、33頁。

29) 前掲『広日本文典別記』、63頁。

30) 中根淑『日本文典』（出版：六角豊治郎、1876年）50頁。

31) 前掲『広日本文典別記』、271頁。

32) 前掲『語法指南』、40頁。

ノ意義ハ、他ノ助動詞ト連帯関係シテ始メテ起ルガ故ニ、今ハ、助動詞ノ條ニテ説クコトトセリ。³³⁾

大槻の文法論は、明治期の近代的な文法論の先駆けとされ、現代の文法論に多大な影響を及ぼしている。助動詞を一種類の品詞として独立させるのは、大槻文法のそれまでの国語研究と大きく違うところでもあるし、国語研究への大きな貢献でもあるとよく評価されている。前述の分析を見ると、動詞の口気を考える中で、中国語やラテン語と比べ、助動詞が日本語の動詞の口気の中で果たす役割の重要性に注目し、一種類の品詞として独立させるまでに至る要因の一つとなる可能性がある。なお、その以前の語学書の中には、助動詞は弓爾乎波の中に混じている。

(4) 大槻以前、「口気 (Voice)」と「能相 (Active)」「所相 (Passive)」との関係を明確的に論述する文法書がない。大槻は『語』の中で、

此ノ口気ニ、能相 (Active) と所相 (Passive) トノ二様アリテ、羅匈語ニテハ、一動詞ノ語体ニ、此ノ二様ノ変ヲ具セリ。然ルニ、我ガ動詞ニテ、此ノ能所ヲ言ハバ、例ヘバ、「打ツ」傳フ」ノ能相タルハ論ナケレドモ、其所相ヲ寫シ出サムトスレバ、別ニ、助動詞ノる、らる (亦、變化アリ、法アリ、) ヲ添ヘテ、「打タル」傳へらる」ナドセズハアルベカラズ。³⁴⁾

のようにラテン語の文法と対照比較をした上で、国語の「能相」と「所相」を述べている。つまり、日本語の中では、同じ動詞の能動的な形は、「能相」となり、受身の形は「所相」に当たる。例えば、「食べる」は「能相」で、「食べられる」は「所相」である。『文』は、「口気」を提出する場所の次に、動詞に「三個行法」を提出している。それは、「順行、退行、逆行」である。例えば、「兵杀了长毛。」は「順行」文で、「兵把长毛杀了。」は「退行」文で、「兵被长毛杀了。」は「逆行」文である。これを考えると、大槻が言う「能相」と「所相」は、「口気」より『文』が言う動詞の「行法」に近い。

また、西洋の動詞には、他動詞のみ「能相」と「所相」があるのに対して、日本語の動詞には、自動詞でも他動詞でも「能相」と「所相」があると、大槻は国語文法と西洋文法の違いも指摘している。

この章の考察をまとめてみると、大槻は、『文』から「口気」という術語を借用し、西洋文法論の「Voice」を訳している。『語』では、「口気」の下位類として、「能相」と「所相」を設定しており、西洋文法と国語文法の違いを合理的に論述できている。しかし、「口気」という「ものの言い方」は、動詞の内部問題として処理すべきか、助動詞の内部問題にすべきか、それとも文末による文の全体的な問題にすべきか、少々混乱が残っている。『広』になると、「相」を改めて「所相、勢相、勢相一転、使役相、敬相」³⁵⁾ という五つに分類している。そして、「文章論」の節で、動詞、形容詞と助動詞を含め、文末の

33) 前掲『語法指南』, 31頁。

34) 前掲『語法指南』, 33頁。

35) 現在一般に「所相」を「受け身」, 「勢相」を「可能」, 「勢相一転」を「自発」, 「使役相」を「使役」, 「敬相」を「尊敬」と呼んでいる。

結び方により、文を三分類している。これにより『語』に残った混乱は、『広』で整理できたと言えるであろう。

五、おわりに

「はじめに」で述べたように、斉木・鷺尾（2012）は、大槻の「口気」という訳語を高く評価している。西洋文法の「Voice」が能動と受動だけを問題にし、使役を含まない概念であるが、その概念をそのまま日本語文法に使うと、西洋文法と日本文法の相違点により、混乱が生じることになったのである。大槻の「口気」という用語の借用を通し、「西洋的ヴォイス」と「脱西洋的ヴォイス」を区別できた。

というのは、明治前期の日本語研究分野には、洋式日本文典と国学風日本文典の研究という二つの立場がある。洋式日本文典の代表としては、中根淑の『日本文典』（1876）がある。その文典の中には、「過去、現在、未来」という三分類が明確に「時」と呼ばれているのに対し、「直説法、不成法、疑問法、命令法」という「其ノ語ノ属スベキ、定規」を表す四分類を曖昧に「此ノ類ノ法」と名づけている。「此ノ類ノ法」と「時」との関係も明らかにしていない。また、国学風日本文典の代表としては、佐藤誠実の『語学指南』（1879）³⁶⁾があるが、その中には、語気の視点から文を分類する内容がない。

「口気」という訳語を使うことにより、大槻は「ヴォイスの視点を日本語に適用し、『使役』などを含める形で西洋的ヴォイス概念を広く捉える」³⁷⁾ことができた。

「口気」という術語の言い方は、国語研究の中で定着していないが、大槻がその用語の使用を通し、国語研究と西洋文法の相違をうまく整理し、日本語動詞の「相」に関する理論体系を築いた。さらに、その多数言語を対照比較する間に、有名な大槻文法の「折衷」理論が芽生えたのではないであろう。

36) 佐藤誠実『語学指南』（出版：佐藤誠実、1879年）。

37) 前掲『日本文法の系譜学——国語学史と言語学史の接点——』、132頁。

